

評価結果報告書

地域密着型サービスの外部評価項目構成

	項目数
I. 理念に基づく運営	<u>11</u>
1. 理念の共有	2
2. 地域との支えあい	1
3. 理念を実践するための制度の理解と活用	3
4. 理念を実践するための体制	3
5. 人材の育成と支援	2
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援	<u>2</u>
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応	1
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援	1
III. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント	<u>6</u>
1. 一人ひとりの把握	1
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し	2
3. 多機能性を活かした柔軟な支援	1
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働	2
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援	<u>11</u>
1. その人らしい暮らしの支援	9
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり	2
<u>合計</u>	<u>30</u>

事業所番号	4390100198
法人名	社会福祉法人 寿量会
事業所名	グループホーム 虹の家
訪問調査日	平成 20 年 12 月 12 日
評価確定日	平成 21 年 1 月 15 日
評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」

○項目番号について

外部評価は30項目です。

「外部」の列にある項目番号は、外部評価の通し番号です。

「自己」の列にある項目番号は、自己評価に該当する番号です。参考にしてください。

番号に網掛けのある項目は、地域密着型サービスを実施する上で重要と思われる重点項目です。この項目は、概要表の「重点項目の取り組み状況」欄に実施状況を集約して記載しています。

○記入方法

[取り組みの事実]

ヒアリングや観察などを通して確認できた事実を客観的に記入しています。

[取り組みを期待したい項目]

確認された事実から、今後、さらに工夫や改善に向けた取り組みを期待したい項目に○をつけています。

[取り組みを期待したい内容]

「取り組みを期待したい項目」で○をつけた項目について、具体的な改善課題や取り組みが期待される内容を記入しています。

○用語の説明

家族等 = 家族、家族に代わる本人をよく知る人、成年後見人などを含みます。

家族 = 家族に限定しています。

運営者 = 事業所の経営・運営の実際の決定権を持つ、管理者より上位の役職者（経営者と同義）を指します。経営者が管理者をかねる場合は、その人を指します。

職員 = 管理者および常勤職員、非常勤職員、パート等事業所で実務につくすべての人を含みます。

チーム = 管理者・職員はもとより、家族等、かかりつけ医、包括支援センターの職員等、事業所以外のメンバーも含めて利用者を支えている関係者を含みます。

1. 調査報告概要表

作成日 平成20年12月24日

【評価実施概要】

事業所番号	4390100198
法人名	社会福祉法人寿量会
事業所名	グループホーム虹の家
所在地 (電話番号)	熊本市奥古閑町4296-1 (電話) 096-223-0632

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」
所在地	熊本市水前寺6丁目41-5
訪問調査日	平成20年12月12日

【情報提供票より】(20年11月7日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	平成 18 年 12 月 12 日		
ユニット数	1 ユニット	利用定員数計	9 人
職員数	9 人	常勤 8 人, 非常勤 1 人, 常勤換算	7.7

(2) 建物概要

建物形態	単独	新築
建物構造	木造平屋 造り	
	1 階建て	1 階 ~ 階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	40,000~45000 円	その他の経費(月額)	430円/日	
敷金	無			
保証金の有無 (入居一時金含む)	無	有りの場合 償却の有無	無	
食材料費	朝食	円	昼食	円
	夕食	円	おやつ	円
	または1日当たり		1630 円	

(4) 利用者の概要(11 月 7 日現在)

利用者人数	9 名	男性	名	女性	9 名	
要介護1	4 名	要介護2	名			
要介護3	4 名	要介護4	1 名			
要介護5	名	要支援2	名			
年齢	平均	86.2 歳	最低	80 歳	最高	98 歳

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	有明海リハビリテーションクリニック、熊本機能病院、銀座通りクリニック
---------	------------------------------------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

広々とした奥古閑地域に、赤いとんがり屋根と、ガラスをふんだんに使った、明るくモダンな建物。敷地入り口から玄関までのアプローチは季節を伝える庭の木々や草花、クリスマスの飾りつけ、ホームの名前が書かれた暖簾など、来訪者を迎える住人の温かい気持ちを感じられる。日差し一杯のリビングでは、日向ぼっこをする人、編み物をする人、コタツに入って人形を抱っこする人、庭の落ち葉を掃く人など、その人その人のペースが守られており、ホームの理念「ゆっくり・じっくり・たっぷり」の生活を何うことが出来る。ホームの菜園で収穫された野菜を母体法人内の「とれとれ市場」で販売し、購入者と地域交流をしたり、売上金で天草日帰り旅行を楽しむなど、介護されるだけではなく、自分たちの力で楽しむ生活を作り出す工夫と支援を行っている。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目①	<p>前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)</p> <p>外部評価の意義を理解し、提案された課題には真摯に取り組み、改善への努力が行われている。①市町村との連携強化が指摘され、事業所のパンフレットや、ひまわりの種の袋詰めを支所カウンターに置くなどの活動で工夫している。②ケアプラン作成には、センター方式を導入している。③災害時を想定し、入居者も参加しての避難訓練実施は、これからの取り組みとなっている。</p>
	<p>今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)</p> <p>開設以来2年目のホームであり、自己評価は管理者が中心となって行ない、そのあと、全職員で検討している。求められるケアのあり方を再認識し、課題発見と改善への取り組みが見られた。</p>
重点項目②	<p>運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)</p> <p>民生児童委員協議会会長・老人クラブ連合会前/現会長・社会福祉協議会会長・自治会連合会会長・地域包括支援センターサルビアセンター長・入所者と家族の参加で2ヶ月に一度開かれている。ホームからは入所者や職員の活動や行事等が伝えられ、委員からは地域行事等の情報が伝えられ、ホームとしての参加に努めている。</p>
	<p>家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)</p> <p>外部評価のために行われた利用者・家族アンケートへの回答は感謝と高い満足度が述べられたコメントが殆どで、ホーム職員への信頼度の高さ、満足度の高さを示している。家族面会時はお茶を出し、ゆっくりした雰囲気の中で、出来るだけ家族の話に耳を傾けることに努めており、日頃のコミュニケーションの結果がアンケートに反映されていると思われた。</p>
重点項目④	<p>日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)</p> <p>朝食前の散歩で、登校する小学生と挨拶を交わし、小学校の「ふれあい交流会」に招待されている。自治体に加盟し、一斉清掃にも参加し、地域保全隊に参加し、チューリップやひまわりの花植え活動を行い、地域の仲間入りをしている。また、ホーム菜園で収穫された野菜をおすそわけしたり、頂いたりの近所付き合いも出来ている。</p>

2. 調査報告書

(部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	理念「ゆっくり・じっくり・たっぷり」には、入居者にゆっくり、じっくり、たっぷり、ホームの生活を満喫してもらいたいという願いがこめられている。また、職員の力と時間を入居者のために、ゆっくり、じっくり、たっぷり使って支援したいという思いも示している。	<input checked="" type="checkbox"/>	
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	入居者のペースに合わせて一緒に過ごすことを大切にしており、手を取りあって近くの地蔵さんまで散歩に出かけたり、暮の大掃除用に雑巾を縫ったり、梅干やラッキョを漬けたり、ゆっくりした日常生活の継続を支援している。天草日帰り旅行は、計画の段階から共に準備して実行。帰った後は写真を見ながら、話題を共有し、たっぷりと楽しむ支援が行われている。	<input checked="" type="checkbox"/>	
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	地域との交流に熱心に取り組んでいる。朝食前散歩では、玄関先で登校する小学生と挨拶を交わし、顔見知りになったことから、小学校の「ふれあい交流会」に招待されている。自治体に加盟し、一斉清掃にも参加し、また、地域保全隊との活動では、チューリップやひまわりなど、花植えにも積極的に参加し、地域に溶け込んだ関係が構築されている。ホームで収穫した野菜をおすそわけしたり、頂いたりの近所付き合いも行なわれている。	<input checked="" type="checkbox"/>	
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	評価を課題発見と改善への機会と捉えている。開設後2年であり、管理者が中心となって自己評価を行い、全職員で検討し、サービスの提供方法について再確認している。	<input type="checkbox"/>	職員が自己評価を実施することで、一人ひとりの介護活動を振り返り、より多くの気づきが期待されると思われる。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に一度開催し、入居者や職員の活動内容やホームでの出来事などを報告し、委員からは地域行事等に関する情報が伝えられる。委員会開催日が平日であるため、家族参加が難しいこともあるが、全家族に参加を促し、意見や要望が言える環境作りにも工夫している。		
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	地域密着型施設として積極的な貢献を試みている。現在、ひまわりの種を袋詰めにして、包括支援センターや支所に置き、地域に花を咲かせる活動を実施しており、将来ひまわり見物を楽しみながら散歩できる地域づくりを目指している。市民の集いで職員が手伝い、市職員と顔馴染みになっている。また、市の相談員も毎月訪れ、入居者の相談を受けている。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々に合わせた報告をしている	毎月、職員手書きの手紙に入所者の写真を添えて家族に報告している。暑中見舞いや年賀状などは、できるだけ入居者の自筆を加え、家族との交信に努めている。体調に変化が見られる際は速やかに家族へ報告し、その後の経過も細やかに伝えており、家族の安心に繋がっている。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時はお茶を出し、ゆっくりした雰囲気の中で出来るだけ家族の話を聴くことが心掛けられている。運営推進委員会に家族の参加を促して、意見や要望を言える環境作りに努めている。外部評価に当たっての利用者・家族アンケートでは殆どが感謝と満足の色を示す回答になっており、家族の意見や思いが伝えやすい関係があることが伺える。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	職員の異動は極力抑える努力をしている。止むを得ず異動する場合は、新任の職員が、前以ってホームを何度か訪問し、入居者と知り合って、顔馴染みの関係作りを図り、利用者へのダメージ軽減に努めている。職員の補充は、経験がある職員の配属など、母体法人と一体となった運営が行なわれている。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	開設後2年の若いホームで、職員の殆どが看護師・介護士・社会福祉士など専門職である。法人全体の人材育成プログラムにそった研修が行なわれている。ホーム職員に求められる実務はOJTを実施し、習熟度に応じて責任と役割を持たせ、育成されている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
	11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援 1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
	12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
	13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている		
III. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント 1. 一人ひとりの把握					
	14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
	15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	アセスメントツールはセンター方式を用い、一日の行動とケアの様子を観察し、より詳しい情報収集に努めている。情報を客観的・科学的に分析し、入居者の活性化や自立度を高める支援を心がけ、現状に即したプランを作成している。		
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	入居者の孫さんの結婚式には職員も正装して付き添い、本人や家族に喜ばれている。家族が県外に住んでいるため、留守宅の心配やお墓参りを希望する入居者には、職員が同行し、希望を実現させている。また、入居者が入院した時は、他の入居者と職員が見舞いに行くなど、柔軟な対応で、惜しみなく支援している様子が見られた。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医の継続受診希望者で、家族が対応できない場合は職員が付き添ったり、訪問医療を依頼することで対応している。また、精神科の受診は日頃の生活状態を報告することが必要であり、ホーム職員が同行している。主治医や医療機関との連携、急変時の連絡体制も整備されており、入居者と家族の安心に繋がっている。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	重度化した場合、本人や家族の希望にそって、ホームでの看取り・同グループ内の特養施設・医療機関への住み替えなど、家族と話し合い同意を得て対応する体制が出来ている。ホームでの看取りのケースはまだないが、職員間では、対応への意識と覚悟が共有されている。		
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	その人の世界をそのまま受け入れ、大先輩に失礼のない言葉使いに配慮している。排泄はさりげなく部屋の個人トイレに誘導し、プライドへ配慮している。入浴誘導・衣服の着脱・浴槽での介助も個別に対応し、プライバシーの確保を行っている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	庭の落ち葉を掃く人、台所で食事の仕度を手伝う人、お人形を抱っこしている人、リビングでコックリコックリする人、自室のコタツにはいって外を眺めながら日向ぼっこする人、乾いた洗濯物をたたむ人、ゆっくりした時の流れに、一人ひとりのペースが大切にされている。生活にメリハリをつけることも大切と、大掃除用の雑巾縫いなど、季節を感じる目標も立てられていた。		
(2)その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の仕度では、団子汁の野菜を切ったり、団子をつくったり、テーブルを拭いたり、配膳したり、食後は食器を洗う人、拭く人、しまう人など入居者同士、自然な流れ作業で片づけをしている様子が見られた。食事中は職員も一緒におしゃべりしながら楽しい食事風景が観察された。新年会や誕生会などは、希望者にはアルコールも提供し、食事を楽しむ支援が行われている。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	入浴日や時間帯は職員が決めるのではなく、本人の希望に沿う支援が行われている。入居者同士誘い合って入浴することもあり、本人の意思が大切にされている。入浴自立の入居者でも、シャンプーを手伝いながらさりげなく介助している。また、菖蒲・柚子・温泉のもとなどを使用して、入浴を楽しむ工夫も実施されている。		
(3)その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	以前編み物をしていた人の側で職員が編み物を始めたり、農業をしていた人を畑に連れ出したり、意欲を引き出す工夫が見られた。今年はホームで採れた野菜やボランティアの援助で作った手作り石鹸を販売した代金で、天草日帰り旅行をするなど、力を引き出し、楽しみと喜びのある日々への支援が行われている。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	お正月前には美容室に髪を整えに出かけ、サルビアや宇土のショッピングセンターまで、服を買いに出かけたり、入居者のその時の希望を聞き支援している。日用品購入のための費用を家族から預かり、買い物時は本人に現金を渡し、出来るだけ自分で支払い、買い物の楽しさを味わう支援も行われている。		
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	玄関は施錠せず、入所者の出入りは、リビングにいる職員が見守っている。ただ建物全体が開放的な作りであり、玄関以外からでも、その気になれば自由に外に出ることが出来る。以前、入所者の姿が見えなくなった際も、幸い5分後に職員が気付き事無きを得たという事例もあり、地域の見守り協力が必要かと思われる。	○	運営推進委員会、自治会、近隣住民等の協力を得て、地域での見守り体制作りの検討も必要かと思われる。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	日頃から避難経路の確認を職員で話したり、両隣には機会あるごとに協力をお願いしてはいるものの、入居者を交えての避難訓練までは行なわれていない。また、母体法人の職員で消防署勤務経験者に避難訓練に関して勉強会を依頼している段階である。	○	母体法人に隣接しているものの、夜間災害時等を想定したホームでの定期的な避難訓練の実施は必要である。災害時対応マニュアルに沿った訓練の実施を期待する。
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	母体施設の管理栄養士が献立をたており、バランスの良い食事が提供されている。現在食事制限が必要な入所者はいないが、必要に応じて対応できる体制にある。一人ひとりの食事と水分の摂取量は個別に記録し、把握されている。義歯の状態など注意深く観察し、食べやすい形態で提供している。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1)居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	敷地入り口から玄関までのアプローチは、ベンチ・季節の草花・クリスマスツリー・虹の家の暖簾などが来訪者を温かく迎え、住人の心を伝えている。採光の良い、回廊式のモダンでお洒落な屋内は、コーナーごとに椅子やテーブルが置かれ、外の景色が楽しめ、ゆっくり過ごせる贅沢な空間が用意されている。建物中央のベランダでは飼い犬が寝そべっており、入所者の癒しとなっている。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	和室・洋室・和洋折衷と入所者一人ひとりの心地よさに合わせた設えになっている。使いなれた布団や和ダンス・お気に入りの椅子とテーブル・家族の写真が一杯飾られたサイドボードなど、安心して、居心地よく過ごせる居室作りの工夫が見られた。自室が分からなくなる人の入り口には「ここが○○様の部屋です」と張り紙で表示し、混乱を軽減する支援を行っている。		

自己評価票

- 自己評価は全部で100項目あります。
- これらの項目は事業所が地域密着型サービスとして目標とされる実践がなされているかを具体的に確認するものです。そして改善に向けた具体的な課題を事業所が見出し、改善への取り組みを行っていくための指針とします。
- 項目一つひとつを職員全員で点検していく過程が重要です。点検は、項目の最初から順番に行う必要はありません。点検しやすい項目（例えば、下記項目のⅡやⅢ等）から始めて下さい。
- 自己評価は、外部評価の資料となります。外部評価が事業所の実践を十分に反映したものになるよう、自己評価は事実に基づいて具体的に記入しましょう。
- 自己評価結果は、外部評価結果とともに公開されます。家族や地域の人々に事業所の日頃の実践や改善への取り組みを示し、信頼を高める機会として活かしましょう。

地域密着型サービスの自己評価項目構成

	項目数
I. 理念に基づく運営	22
1. 理念の共有	3
2. 地域との支えあい	3
3. 理念を実践するための制度の理解と活用	5
4. 理念を実践するための体制	7
5. 人材の育成と支援	4
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援	10
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応	4
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援	6
III. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント	17
1. 一人ひとりの把握	3
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し	3
3. 多機能性を活かした柔軟な支援	1
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働	10
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援	38
1. その人らしい暮らしの支援	30
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり	8
V. サービスの成果に関する項目	13
合計	100

○記入方法

[取り組みの事実]

ケアサービスの提供状況や事業所の取り組み状況を具体的かつ客観的に記入します。(実施できているか、実施できていないかに関わらず事実を記入)

[取り組んでいきたい項目]

今後、改善したり、さらに工夫を重ねたいと考えた項目に○をつけます。

[取り組んでいきたい内容]

「取り組んでいきたい項目」で○をつけた項目について、改善目標や取り組み内容を記入します。また、既に改善に取り組んでいる内容・事実があれば、それを含めて記入します。

[特に力を入れている点・アピールしたい点] (アウトカム項目の後にある欄です)

日々の実践の中で、事業所として力を入れて取り組んでいる点やアピールしたい点を記入します。

○用語の説明

家族等 = 家族、家族に代わる本人をよく知る人、成年後見人などを含みます。

家族 = 家族に限定しています。

運営者 = 事業所の経営・運営の実際の決定権を持つ、管理者より上位の役職者(経営者と同義)を指します。経営者が管理者をかねる場合は、その人を指します。

職員 = 管理者および常勤職員、非常勤職員、パート等事業所で実務につくすべての人を含みます。

チーム = 管理者・職員はもとより、家族等、かかりつけ医、包括支援センターの職員等、事業所以外のメンバーも含めて利用者を支えている関係者を含みます。

○評価シートの説明

評価調査票は、プロセス評価の項目(No.1からNo.87)とサービスの成果(アウトカム)の項目(No.88からNo.100)の2種類のシートに分かれています。記入する際は、2種類とも必ず記入するようご注意ください。

事業所名	グループホーム虹の家
(ユニット名)	
所在地 (県・市町村名)	熊本県熊本市奥古閑町4296番1
記入者名 (管理者)	村上まゆみ
記入日	平成 20 年 11 月 7 日

地域密着型サービス 自己評価票

自己評価	外部評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組んで いきたい 項目)	取り組んでいきたい内容 (既に取り組んでいることも含む)
I 理念に基づく運営					
1 理念の共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげ	母体施設の「自由と自立・共生と共育」をもとに「ゆつくり・じっくり・たっぷり」と入居者と日々を共に過ごし、時間にとらわれず、住み慣れた地域でその人らしい暮らしが継続できるように支援することを目指している。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる。	時間にとらわれずに入居者とゆつくり関わっている。地域の一人を感じて頂けるように地域の活動に参加したり子供たちとの関わりを大事にした生活を支援を心掛けている。		
3		○家族や地域への理念の浸透 事業所は、利用者が地域の中で暮らし続けることを大切にしたい理念を、家族や地域の人々に理解してもらえよう取り組んでいる。	パンフレットや重要事項説明書に記載し、契約時や運営推進会議の際にご家族や地域の方々に伝えている。また、ホーム内に2ヶ所、運営規定等を冊子にして置いており、来所者が閲覧できるようになっている。ホームページの記載も行っている。	○	ホームページにはホームの紹介だけになっている。今後は、中での暮らしの様子などの記載も考えていきたい。
2 地域との支え合い					
4		○隣近所とのつきあい 管理者や職員は、隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄りてもらえるような日常的なつきあいができるように努めている。	散歩や草取り等で地域の方に出会った時には必ず挨拶をするように心掛けている。朝食前には、入居者と職員で通学路に立ち、挨拶運動を実施している。以前より子供達の訪問が多い。また、近所から野菜を頂いたり、おすそ分けをしたりするつきあいができるようになった。		
5	3	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一人員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている。	運営推進会議で情報を集め市民のつどい、小学校のふれあい交流会、一斉清掃への参加など地域の方々との交流に努めている。また、環境保全隊の活動で道路に花を植え地域の方に楽しんでもらっている。	○	花の種を郵便局や支所などに置いて地域の方に楽しんでもらうように計画をしている。また、今後、自治会に入り地域の方々の交流を一層深めていきたい。
6		○事業所の力を活かした地域貢献 利用者への支援を基盤に、事業所や職員の状況や力に応じて、地域の高齢者等の暮らしに役立つことがないか話し合い、取り組んでいる。	ケアハウスやデイサービス利用の方と交流の場をつくり気軽に立ち寄ることができるような雰囲気を作っている。地域の高齢者にここにも(グループホーム)地域の高齢者が生活していて、気軽に立ち寄り場所がある事を分かってもらい、地域の高齢者の安心の場になるようにしたい。	○	地域の一人暮らしの高齢者の方にグループホームの事を知ってもらう機会を作りたい。
3 理念を実践するための制度の理解と活用					
7	4	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる。	評価を受けることで地域密着型サービスについて再確認することができます。職員も新たな気持ちで意欲を持ち、入居者の興味・発見に取り組んでいます。指導して頂いたことに対しては対応しながら生活を支援している。	○	評価を受けた後改善すべき点については早急に対応していきたい。
8	5	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かす	2ヶ月に1回、定期的の実施している。入居者活動内容や病気や事故など運営推進会議資料を作り生活の様子を報告している。また、会議の中で地域である催しを聞き、地域の中に出て行くようにしている。推進会議の委員の方とは出先でも顔を合わせて、外での入居者の顔を見てもらっている。	○	今後も推進会議の委員より地域の情報を頂いた、地域の一員としての暮らしができるように生活支援をしたい。
9	6	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来をする機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる。	支所や包括支援センターに施設のパフレットを置かせてもらっている。また、今年は市民の集いの実行委員として計画・準備から携わり職員の顔を知ってもらった。利用者も地域の方と一緒に祭りを楽しんだ。	○	地域包括支援センターに立ち寄り、地域包括支援センターの方がグループホームに寄って頂くよう関係を深め、地域の高齢者の方の情報交換や地域の高齢者の役に立てることを考えていきたい。
10		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、地域福祉権利擁護事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、必要な人にはそれらを活用できるよう支援している。	現在、入居者のうち1名の方が利用されている。地域福祉権利擁護事業についての勉強会でとりあげた。また、成年後見制度の勉強会にも参加して理解を深めた。	○	今後、制度(成年後見制度)を利用する方が出てくると思われる。必要な方に活用できるような支援をしていきたい。
11		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内で虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている。	高齢者虐待防止関連法の再認識や事例を通して考える機会(勉強会)を開催して虐待について考えた。		
4 理念を実践するための体制					
12		○契約に関する説明と納得 契約を結んだり解約をする際は、利用者や家族等の不安、疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている。	契約する時には、理解・納得して頂けるよう説明をしている。今回、契約内容の変更を行ったが理解を得られて再契約を行った。		
13		○運営に関する利用者意見の反映 利用者が意見、不満、苦情を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させてい	日常生活の中で行動や表情を観察し、声かけをして意見を伺うようにしている。また、苦情申出窓口(苦情受付担当者・第三者委員)を設置し外部へ表せるようにしている。併せてその内容が来所者へ分るよう、冊子にして置きかつ、重要事項説明書に記載している。	○	これまでに苦情はあっていないが、あった場合には、その内容を記録しその背景や対応方法を整理・分析し今後のサービス提供に活かしていきたい。
14	7	○家族等への報告	入居者の様子や健康状態については、月1回手紙		

15	8	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている。	面会や電話で家族と接する時には話を伺うようにしている。また、苦情申出窓口(苦情受付担当者や第三者委員)を設置し、苦情等を外部へ表せる体制を整えている。その内容も重要事項説明書へ記載し、ホーム内に冊子に置いて置いている。	○	これまでに苦情はあっていないが、あった場合には、内容を記録し、背景や対応方法を整理・分析し今後のサービス提供に活かしていきたい。今後、家族の要望を伺う方法としてアンケートなどを考えていきたい。
16		○運営に関する職員意見の反映 運営者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている。	管理者は日頃より声掛けをし、職員の意見をきくようにしている。また、話にくいことなど内容によっては、母体施設の役職者等に相談できるように協力を依頼している。		
17		○柔軟な対応に向けた勤務調整 利用者や家族の状況の変化、要望に柔軟な対応ができるよう、必要な時間帯に職員を確保するための話し合いや勤務の調整に努めている。	外出など催し物をする際には、日勤者を増やすなど調整をしている。また、家族の要望については、実現できるような対応を考えていく。		
18	9	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者がなじみの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている。	他事業所の異動や結婚・出産を理由に離職があった。そのため、母体施設と連携を取り、経験あるスタッフを確保している。利用者の不安が少ないように、異動の前に時々施設に顔を出してもらい、入居者と職員が顔なじみの関係ができるように心掛けをした。		
5 人材の育成と支援					
19	10	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画を立て、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている。	月1回開催される法人内の園内研修等へ参加するようにしている。また、老人福祉施設研究大会などの外部の研修にも参加する機会を確保している。また、認知症の人と家族の会の事務局員としてつどいに参加、家族と話をする機会を作っている。今年は、認知症介護研修も2名受講した。	○	今後も職員育成として研修などの機会をつくりサービスの質の向上につなげていきたい。
20	11	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させている。	熊本市のグループホーム連絡協議会に入会し、勉強会等へ参加することでサービスの質の向上に努めている。また、認知症介護研修の実習施設であるため、他のグループホームの方と交流する機会ができています。職員も刺激を受けながらケアに取り組んでいる。		
21		○職員のストレス軽減に向けた取り組み 運営者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	職員同士の親睦の機会を作る、外部者と接する機会をつくる、悩みなどお互い話し合える雰囲気作りを心掛けている。		
22		○向上心を持って働き続けるための取り組み 運営者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、各自が向上心を持って働けるように努めている。	勤務状況や研修参加状況などを把握している。また、個々の得意とすることを活かすことができるような役割を待たせ、意欲を持って仕事ができるように心掛けている。次の意欲に繋がるようにやり遂げた時や努力については認め労っている。今年は各自で個人の目標を決めてケアに取り組んでいる。		
II 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
23		○初期に築く本人との信頼関係 相談から利用に至るまでに本人が困っていること、不安なこと、求めていること等を本人自身からよく聴く機会をつくり、受けとめる努力をする。	入居申請から入居にいたるまで、ホームの見学をして頂く、入居前に自宅訪問をするなどし、本人の不安なことなどを聞くようにしている。また、事前にケアマネジャーや関わりのあったサービス事業所より情報を得るようにしている。	○	今まで入居者の変更はない。入居の申込の際は、話しをすることで少しでも家族の不安が解消できる様に困っていることや不安な事、求めていること等、時間を掛けて相談を聞いている。現状でアドバイスができる事は行っている。
24		○初期に築く家族との信頼関係 相談から利用に至るまでに家族等が困っていること、不安なこと、求めていること等をよく聴く機会をつくり、受けとめる努力をしている。	入居前から入居にいたるまで、ホームの見学をして頂く、入居前に自宅訪問をするなどし、家族の不安なことなどを聞くようにしている。また、事前にケアマネジャーや関わりのあったサービス事業所より情報を得るようにしている。		
25		○初期対応の見極めと支援 相談を受けたときに、本人と家族が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている。	相談を受け、すぐの入居が難しいため、現在の様子やサービスの利用状況を確認しそれに応じた情報を提供したり、関係機関へつなぐようにしている。		
26	12	○なじみながらのサービス利用 本人が安心し、納得したうえでサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気になじめるよう家族等と相談しながら工夫している。	グループホームへの入居が決まってからも、一度に引越しをするのではなく、荷物を少しずつ搬入したり、家族で過ごす時間を作るなど、本人を始め、職員や他の入居者が徐々になじめるように、家族と相談しながら入居をすすめている。		
2 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
27	13	○本人とともに過ごし支え合う関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支え合う関係を築いている。	一緒に笑い楽しみ、悲しいことがあれば泣いたり、生活する家族のような関係が築けている。若いスタッフは、お茶の出し方や調理方法・地域の祭りの内容など入居者より学ぶことも多く支えあう関係もできている。職員と利用者の関係はかりでなく、利用者同士もできない所を他の仲間が手助けする関係が自然と生まれ、支え合う関係が深まっているように感じる。		
28		○本人を共に支え合う家族との関係	全てを職員がしてしまうのではなく、家族にも役割		

	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係が築いていけるように支援している。	関係が続くよう面会の際の言葉かけには配慮している。面会時に職員が付き添ったり、家族同士にしたり、状況で判断している。	
30	○なじみの人や場との関係継続の支本人がこれまで大切にしてきたなじみの人や場所との関係が途切れないう、支援に努めている。	入居前に利用していたお店や病院などに引き続き通うことで人や場所との関係が切れないようにしている。また、以前利用されていたサービスの仲間と交流が持てるようにしたり、地域のお祭りに参加して地域の馴染みの方と会えるように配慮している。	
31	○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるように努めている。	入居者同士の関係や力を上手に活かすことを心掛けている。入居者同士が誘い合って洗濯たみをしたたり、散歩に行ったり、また、お茶の際に自然とお菓子の包みを開けたりの関係もできている。気の合う者同士が部屋を行き来したり、一緒に調理をしたり支えあって生活している場面を口づかす生活の中に感じている。	
32	○関係を断ち切らない取り組み サービス利用（契約）が終了しても、継続的な関わりを必要とする利用者や家族には、関係を断ち切らないつきあいを大切にしている。	これまでにサービス利用が終了した方はいない。グループホームでの生活が困難となりサービス利用が終了した場合であっても、その後の生活場所への引継ぎを行ったり、将来への不安等を伺い、安心して生活ができるよう支援できる旨を入居の際に家族へ説明をしている。	
Ⅲ その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント			
1 一人ひとりの把握			
33	14 ○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している。	思いや意向を話の中から把握するように努めている。また、以前の暮らしぶりや性格等家族より情報を得て、本人の気持ちにできるだけ沿うように努めている。「○○したい」「○○に行きたい」と本人の声も聞かれるようになった。後回しにせずに、本人が希望するときに実現するように心掛けている。	
34	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴やなじみの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている。	改めて時間を設け話を伺うことはしていないが、一緒に家事や散歩などをする中で本人より話を伺ったり、ご家族の面会時に話をしたりし把握するように努めている。	
35	○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状を総合的に把握するように努めている。	できること・できないことなどを生活の中で把握し「気づきノート」に記載するようにしている。生活の中で個々の一日の過ごし方や心身状態のサインや行動などが見えてきた。個々に合った生活をゆっくり見守って行きたい。	○ よりよい生活を送ることができるようケアプラン等に活かしていきたい。
2 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し			
36	15 ○チームで作る利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している。	月2回ケースカンファレンスを開催し、課題を検討し介護計画を作成している。無理強いはしないが本人の力を活かした自立支援ができるようなケアを目指している。より本人を知るためにセンター方式を活用している。	○ 今後、本人の一日の生活のリズムを把握するために、24時間シートを作り介護計画に活かしたい。
37	16 ○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している。	ケースカンファレンスの中で見直しを行っている。また、個々の状態の変化に応じ、随時、話し合いをし見直しをしている。	
38	○個々の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。	日々の様子等は個別の記録や「気づきノート」に記載している。個別記録は普段の生活の様子が分かるように「できた」「できなかった」に留まらずに「困った様子」など内容を詳しく記録するようにしている。また、「気づきノート」や「申し送り」などで情報の共有を図っている。	
3 多機能性を活かした柔軟な支援			
39	17 ○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている。	開設して2年経過が経過した。(通所や短期入所等)多機能性はないが、グループホームとして、入居者や家族の要望に対しては叶えるように個別的な支援は行っている。	
4 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働			
40	○地域資源との協働 本人の意向や必要性に応じて、民生委員やボランティア、警察、消防、文化・教育機関等と協力しながら支援している。	派出所にパトロールを依頼したり、小学校に協力を得て子供との交流を行っている。また、花見や日帰り旅行など人手が必要な時は外出付き添いや話し相手となっていたボランティアさんに協力を得て支援をしている。	
41	○他のサービスの活用支援 本人の意向や必要性に応じて、地域の他のケアマネジャーやサービス事業者と話し合い、他のサービスを利用するための支援をしている。	現在までにそのような支援をした方はないが、意向や必要性により在宅での生活になる場合などにはケアマネージャーやサービス事業者と話し合い、支援していきたいと考える。	
42	○地域包括支援センターとの協働 本人の意向や必要性に応じて、権利擁護や総合的かつ長期的なケアマネジメント等について、地域包括支援センターと協働している。	現在までにそのような支援をした方はないが、意向等により長期的なケアマネジメントが必要な場合は地域包括支援センターと協働し支援していきたいと考える。	
43	18 ○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	入居前に家族と相談しかかりつけ医を決定している。受診など家族で対応が困難な時は付き添い介助をしたり、訪問診療を依頼するなど適切な医療を受けることができるよう医療機関と連携を図っている。受診に付き添ったりして主治医との関係も取れている。急変時も連絡体制もできている。	

	利用者をよく知る看護職員あるいは地域の看護職と気軽に相談しながら、日常の健康管理や医療活用の支援をしている。	チェックや観察をし申し送りを行うことで健康状態を常に把握している。また、不在時でも連絡が取れる体制にあり急変でも速やかに対応できるようにしている。	
46	○早期退院に向けた医療機関との協力が利用者が入院した時に安心して過ごせるよう、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて連携し	入居者の入院に伴い、家族に今後の経過や入院における施設の関わりを説明し不安の軽減を図った。また、入居者に対してはできるだけなれた職員や仲間の顔を見せて不安の軽減を図った。主治医とは、普段の生活状態や早期の退院に向けて退院のゴールを話し合った。面会時には病院関係者と情報交換を行い利用	○ 入院された場合には、これまでの様子や健康状態について医療機関へ情報を提供し、退院の際には病院関係者や家族を交えカンファレンスを行いグループホームでの生活への生活へスムーズに移行できるよう支援していきたい。
47	19 ○重度化や終末期に向けた方針の共有化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等並びにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している。	入居時に重度化された場合や終末期を迎えられた場合には住み替えとなる旨を家族へ説明をしている。何処で終末を迎えるか、家族や本人の希望を伺う。施設を希望された場合はかかりつけ医との連携やグループホームでのできごとやできないことの確認を行い、その方針を全員で共有していきたい。家族の希望に沿うよう	○ 本人や家族の気持ちは変化するものであり、状態の変化がある際には随時、家族や本人の意向を把握し、グループホームでのできごとやできないことの確認を行い、その方針を全員で共有していきたい。
48	○重度化や終末期に向けたチームでの支援 重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、事業所の「できること・できないこと」を見極め、かかりつけ医等とともにチームとしての支援に取り組んでいる。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	状態は改善したが終末期の状態に家族に終末の意向を確認した。家族の希望があった。施設には看護師を配置し、本人の状態を踏まえ、本人や家族の希望と事業所ができること、できないことを見極め、医療と連携を図りながら安心して生活ができる体制作りを行っている。	
49	○住み替え時の協働によるダメージの防止 本人が自宅やグループホームから別の居所へ移り住む際、家族及び本人に関わるケア関係者間で十分な話し合いを情報交換を行い、住み替えによるダメージを防ぐことに努めている	現在まで住み替えをされた方はいない。	○ 今後、そのような場合には関係機関と連携を図り、情報交換を十分にを行い、面会等を実施することでダメージを最小限に食い止めることができるよう支援していきたい。

IV その人らしい暮らしを続けるための日々の支援

1 その人らしい暮らしの支援

(1) 一人ひとりの尊重

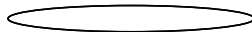
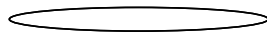
50	20 ○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取扱いをしていな	人生の先輩であることを忘れず、その方の世界をそのまま受け入れるような対応を心掛けている。排泄誘導や失敗などにも騒がず部屋の個人のトイレで対応している。また、入浴も誘導・衣服の着脱・浴槽の対応まで個別に対応してプライバシーの確保に	
51	○利用者の希望の表出や自己決定の支援 本人が思いや希望を表せるように働きかけたり、わかる力に合わせた説明を行い、自分で決めたり納得しながら暮らせるように支援している。	動きや会話など、先走りせずゆっくりとした気持ちで何うようになっている。したいことや食べたいものなど、本人の希望を聞きながら行っている。希望を表出しにくい方には、これまでの生活歴や嗜好などの情報を収集し、また家族からの情報も活かし、それを話題にしながら声をかけていくようにしている。	
52	21 ○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援してい	食事の準備を手伝う方、片付けを手伝う方、洗濯物たたみをする方、部屋でのんびりする方と、できる限り一人ひとりのペースを守る支援を心掛けている。また、外出する時は一緒に服を選んだり、化粧をしたりおしゃれを楽しんだりしている。催し物の際は職員のペースにならないように、日中の職員配置を多くするなど時間に余裕を持つことができるよう心掛けている。	○ 今後も入居者一人ひとりのペースを大切にしたい生活ができるように支援していきたい。

(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援

53	○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援し、理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	服装や髪型については家族や本人の意向・嗜好に配慮している。入居前から利用している美容室を利用したり、また、希望にあわせて(カット・パーマ・染めなど)理美容院の利用を支援している。化粧用具を購入し自ら化粧ができるようにしている。	○ 入居者の方がいつまでもおしゃれに気づかない笑顔が絶えない生活が送れるような支援をしたい。
54	22 ○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片づけをしている。	日常生活の中で個々のできることでできないことを把握し、それに応じて職員と一緒に調理や片付けを行っている。自分達で作った梅干しや漬物を並べたり、時には気分を変えてお弁当を作って楽しんでいる。仲間と一緒に食べたり、家族と楽しんだり、食事を楽しくできる様に工夫をしている。	
55	○本人の嗜好の支援 本人が望むお酒、飲み物、おやつ、たばこ等、好みのものを一人ひとりの状況に合わせて日常的に楽しめるよう支援している。	事前に家族より情報を得たり、生活する中で入居者と話をしたりすることで嗜好について把握している。また、それについて制限することなく一緒に買物に行ったりおやつを作ったりするなど楽しみとなるように支援している。部屋でお酒を楽しむ方や時々夕食にお酒を準備して仲間でお酒を楽しむ事もある。	
56	○気持ちよい排泄の支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして気持ちよく排泄できるように支援している。	生活を通して個々の排泄リズム・排泄サイン(言葉や行動)を把握している。記録は、排泄が「あった」、「なかった」だけでなく、トイレまでの移動状態や腰部を擦って刺激したら見られたなど、排泄状況が分かるようにしている。できるだけ、オムツに頼らないトイレで気持ちよく排泄できるように支援して	
57	23 ○入浴を楽しむことができる支援	入浴日や時間を決めることなく本人の意向に	

(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援				
59	24	○役割、楽しみごと、気晴らしの支張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている。	一人ひとりの生活歴や現在できることを把握し、役割や楽しみとしていかなることができるような場面をつくっている。毎日の食事の準備や片付け、洗濯たみ、掃除など家の中ばかりでなく、地域の環境活動に参加して地域を花できれいにするなど地域の一員として役割を感じ、地域をきれいにする喜びや感謝される喜びが、楽しみや次の意欲に繋がっている。	
60		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	管理が可能な方については家族に説明し、本人に少額持たせていただき、お菓子などの買物の際には自分で選び支払いをする機会をつくっている。	
61	25	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさず、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している。	散歩や買物など一人ひとりの状態や希望に沿って出かけることができるよう、入居者の好きなこと興味があることを知り支援している。花見やピクニックなど行事だけでなく普段の生活の中に挨拶運動やお地蔵さん参りと外に出る機会を作っている。	
62		○普段行けない場所への外出支援 一人ひとりが行ってみたい普段は行けないところに、個別あるいは他の利用者や家族と共に出かけられる機会をつくり、支援している。	花見やピクニック・地域の祭りなどみんなとで掛ける機会を作っている。また、日帰り旅行を計画して食事や足湯を楽しんだりした。個別ではデパートに行ったり、ふるさと訪問・墓参りを計画して出かける機会をつくり支援している。	○ 今後も会話の中から、行きたい所などの把握に努め、入居者の思い出に残る時間を作るよう支援していきたい。
63		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	月1回の職員から家族への手紙に一言、入居者にも書いていただいたり、年賀状や暑中お見舞いを一緒に書くなどしている。家族だけでなく、友人ともハガキのやり取りはできている。電話に関しては制限はしておらず、入居者のプライバシーに配慮し、子機を使用し居室で話されることもある。	
64		○家族やなじみの人の訪問支援 家族、知人、友人等、本人のなじみの人たちが、いつでも気軽に訪問でき、居心地よく過ごせるよう工夫している。	なじみの方々の訪問には職員・入居者ともに笑顔で出迎え、その時の状況でリビングで過ごして頂いたり居室へ案内したりしている。また、お茶などを出しゆっくりくつろいでいただけるよう声をかけている。	
(4) 安心と安全を支える支援				
65		○身体拘束をしないケアの実践 運営者及び全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	勉強会にて身体拘束について取り上げ、理解できており、身体拘束は行っていない。	○ 虐待と同じように定期的に勉強する機会を作ることで、職員の意識を低下させないようにしていきたい。
66	26	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる。	入居者の行動を把握して気配り、目配りで利用者の安全に努めている。夜間の防犯のための施錠以外は鍵をかけていないため、今後も入居者の安全な生活を守るために気をゆるめずに生活を支援する。	
67		○利用者の安全確認 職員は本人のプライバシーに配慮しながら、昼夜通して利用者の所在や様子を把握し、安全に配慮している。	所在確認表にて所在確認を行っている。また、来所者が多い時などは特に注意し様子を観察し、安全に配慮している。	
68		○注意の必要な物品の保管・管理 注意の必要な物品を一律になくすのではなく、一人ひとりの状態に応じて、危険を防ぐ取り組みをしている。	一人ひとりの状況に応じてはさみ等の持ち込みはあっている。包丁などはホームで管理をし職員と一緒に使用するようになっている。	
69		○事故防止のための取り組み 転倒、窒息、誤薬、行方不明、火災等を防ぐための知識を学び、一人ひとりの状態に応じた事故防止に取り組んでいる。	消防法令や防火安全の課題や対策について勉強会を行った。また、夕食の前には高齢者の窒息を起こしやすい食べ物や窒息時の対応などについて学び事故防止に取り組んでいる。今後も勉強会を通して事故に対する意識を高めていきたい。	○ 今後、勉強会でその他の事故に関することを学び、一人ひとりの状態を把握し、事故が発生する危険性について意識を高め防止に努めていきたい。
70		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備え、全ての職員が応急手当や初期対応の訓練を定期的に行っている。	緊急時対応マニュアルがあり、職員同士で確認するよう声かけをしている。救急蘇生などは母体施設の研修で学んでいる。	○ 救急蘇生や応急手当などについては、今後、機会を作り学んでいきたい。
71	27	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている。	災害対策マニュアルがあり、職員同士で確認するよう声かけをしている。また、日頃より避難経路の確認を職員や入居者も交えて話をしたりしているが、全員の入居者が動いて訓練するまでには至っていない。地域の協力として両隣には、機会事に協力を願う声掛けを行っている。	○ ホームでの訓練のあり方や災害時に地域の人々の協力を得ることができるためには、どのように働きかけていくか等を検討していきたい。
72		○リスク対応に関する家族等との話し合い 一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にされた対応策を話し合っている。	環境の変化により起こるリスクについては入居時に、状態の変化により起こり得るリスクについては面会の時に、家族へ説明を行っている。抑圧感のない暮らしを支援して行きたい。	
73		○体調変化の早期発見と対応	毎日、バイタルサインチェックを行っている。また、	

	職員は、便秘の原因や及ぼす影響を理解し、予防と対応のための飲食物の工夫や身体を動かす働きかけ等に取り組んでいる。	の際には水分や果物などの摂取を促している。散歩や体操など身体を動かすことは行っているが、便秘予防を意識しての取り組みは行っていない。	○	の行動障害、ソワソワなど）関わりを観察して行く、便秘が原因の精神的なイライラがない生活ができる様に支援して行きたい。
76	○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や力に応じた支援をしている。	日中は汚れや臭いがある時に口腔ケアの声かけや介助を行い清潔に努めている。夕食後は口腔ケアを徹底しており、義歯の管理が困難な場合には職員で管理をしている。		
77	28 ○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている。	基本的な食事は母体施設の管理栄養士が栄養のバランスを考えた食事を提供している。一人ひとりの食事摂取量や水分摂取量を個別記録に記載し、一日の量を把握するようにしている。摂取量が少ない場合には、食事の形態を変えたり水分もお茶やジュースにする等個々にあった対応を行っている。		
78	○感染症予防 感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、実行している。（インフルエンザ、疥癬、肝炎、MRSA、ノロウイルス等）	予防接種を受けたり、うがい手洗いの徹底に努めている。また、調理前の手洗いも必ず声をかけ実施している。その他、感染症に対する取り決め（マニュアル）をしており、流行の時期の前に、職員同士で病気になることへの勉強会を行い予防や対応を確認している。		
79	○食材の管理 食中毒の予防のために、生活の場としての台所、調理用具等の衛生管理を行い、新鮮で安全な食材の使用と管理に努めている。	月2回台所掃除の日を決め、食品保管庫や冷蔵庫なども含め清掃を行っている。また、布巾などは毎日洗濯し、まな板・包丁などの調理器具、食器類など消毒を行っている。		
2 その人らしい暮らしを支える生活環境づくり				
(1) 居心地のよい環境づくり				
80	○安心して出入りできる玄関まわりの工夫 利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、安心して出入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	入り口には門扉を設置せず玄関も開放している。玄関周囲には花を植えたり、手作りの表札を飾るなどし出入りしやすい雰囲気作りに努めている。また、季節に応じた飾り（鯉のぼりを飾る、クリスマスツリーを飾る、門松を飾るなど）をしている。		
81	29 ○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、利用者にとって不快な音や光がないよう配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている。	食堂やリビングはカーテンや植木などにより不快な音や光がないように配慮している。また、玄関、廊下、リビング、台所などは季節に応じた花など入居者と一緒飾り、季節を感じてもらえるような工夫をしている。		
82	○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中には、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。	居室の間（廊下）にセミパブリックスペースを設けており、気が合う者同士で話ができたり、読書をしたり音楽を聴いて少人数や一人でくつろぐ事ができるよう本やレコードなどを設置している。		
83	30 ○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	ご家族に協力を得て、使い慣れた家具や布団、人形などの生活用品を自由に持ち込んでいただき、その方らしい部屋作りを行っている。また、入居者の状態の変化に、その方に合ったベッドに変更するなど、居心地よく過ごして頂けるような工夫をしている。		
84	○換気・空調の配慮 気になるにおいや空気よどみがないよう換気に努め、温度調節は、外気温と大きな差がないよう配慮し、利用者の状況に応じてこまめに行っている。	全居室とトイレに換気扇が設置しており、24時間喚起を行っている。また、掃除の際には窓を開けるなど換気を適宜行っている。室温は、共有の場合は温度を確認し調整をおこなっている。居室については、特に夜間に関しては巡回時に室温の確認を行っている。		
(2) 本人の力の発揮と安全を支える環境づくり				
85	○身体機能を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの身体機能を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している。	玄関外階段やトイレには手すりやその代わりとなる衝立を設置し、段のあるところには目印となるようカーテップを貼っている。また、入居者の状態に合わせて介護用ベッド、家具ベッドなどを準備し、できるだけ自立した生活が送れるようにしている。また、ガラスドアに衝突がないよう飾りをつけ工夫している。	○	現在のところ、見守りや軽度の介助により入浴ができており手すりなどの設置はしていない。しかし、浴室は転倒しやすい場所であり、今後、入居者の身体機能の低下にあわせて手すりなど安全面の確保にも努めていきたい。（現在、入浴時に滑り止めマットを使用している。）
86	○わかる力を活かした環境づくり 一人ひとりのわかる力を活かして、混乱や失敗を防ぎ、自立して暮らせるように工夫している。	ご自分の居室やトイレが分らない方に対しては名前などを掲示している。状態によって、今まで使っていたトイレの場所が分からないことがあ、その際には本人が混乱しないように、いつも使用する場所に毎回静かに誘導し、本人の混乱を強くない工夫		
87	○建物の外周りや空間の活用 建物の外周りやベランダを利用者が楽しんだり、活動できるように活かしている。	建物周囲の植物等へ水をあげる、草を取る、デッキに腰掛け花を見る、お茶を飲みながら話をする、漬物をつけるなど日々の生活の中でデッキや植物など活用している。		



		③たまにある ④ほとんどない
90	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている。	①ほぼ全ての利用者が ②利用者の2/3くらいが ③利用者の1/3くらいが ④ほとんどいない
91	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている。	①ほぼ全ての利用者が ②利用者の2/3くらいが ③利用者の1/3くらいが ④ほとんどいない
92	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている。	①ほぼ全ての利用者が ②利用者の2/3くらいが ③利用者の1/3くらいが ④ほとんどいない
93	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている。	①ほぼ全ての利用者が ②利用者の2/3くらいが ③利用者の1/3くらいが ④ほとんどいない
94	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている。	①ほぼ全ての利用者が ②利用者の2/3くらいが ③利用者の1/3くらいが ④ほとんどいない
95	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています。	①ほぼ全ての家族と ②利用者の2/3くらいと ③利用者の1/3くらいと ④ほとんどできていない
96	通いの場やグループホームになじみの人や地域の人々が訪ねて来ている。	①ほぼ毎日のように ②数日に1回程度 ③たまに ④ほとんどない
97	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている。	①大いに増えている ②少しずつ増えている ③あまり増えていない ④全くいない
98	職員は、生き活きと働けている。	①ほぼ全ての職員が ②職員の2/3くらいが ③職員の1/3くらいが ④ほとんどいない
99	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う。	①ほぼ全ての利用者が ②利用者の2/3くらいが ③利用者の1/3くらいが ④ほとんどいない
100	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う。	①ほぼ全ての家族等が ②家族等の2/3くらいが ③家族等の1/3くらいが ④ほとんどできていない